

京都の天文学【4】

藤原定家は、なぜ超新星の記録を残したか

臼井 正（京都学園大学）

1. はじめに

藤原定家の日記『明月記』には、かに星雲（M1）のもととなった 1054 年の超新星の記録があることで有名です。この超新星の詳しい記録は日本と中国にしかなく、その他にはアラビア語の文献に簡単な記述があるだけで、ヨーロッパにはありません。ただ、定家が生れたのは 1162 年で、『明月記』に超新星の記録が書かれたのは更に後のことです。そこで今回は、なぜ歌人である定家が自分が生まれる前の超新星に興味を持ち、どこからデータを入手したのかを探っていきます。

2. 『明月記』の客星記録

定家は藤原俊成の子として応保二（1162）年に生まれ、19 才の時から『明月記』の記述がはじまります。当時の日記は今と違って、儀式の詳細を書きとめて子孫に伝えるためのものでした。定家が生きたのは、源平の争いから鎌倉幕府の成立、承久の乱へと続く激動の時代に当たり、『新古今和歌集』の撰者をしたころは苦勞したようですが、晩年にはようやく落ち着き、『小倉百人一首』を編んだりして余生をすごし、80 才で亡くなりました。

1054 年の超新星の記録は定家 69 才の時、寛喜二（1230）年に出現した客星の所に出てきます。客星とは、普段見慣れない星のことで、超新星、新星、それから彗星も含まれますが、この時の客星は彗星でした。以下、その時の経過を『定家「明月記」の天文記録』[1]をもとに簡単にまとめます。

客星の記述が初めて出てくるのは、この年の十一月一日（ユリウス暦で 1230 年 12 月 6 日。以下の日付は旧暦）のことで、十一月四日には定家自身この星を見て、「この星朧々として光薄し。その勢い小にあらず。」と記しています。続いて「去る二日、泰俊（やすとし）朝臣（あそん）示送す。」として彼からの報告が書かれていますが、この人物については次節で詳しく見ていきます。彼の報告の中に「当時のごとくば、客星の条不審なし（今

のような時世では客星が出現しでも不思議ではない」とあるのは、この年と次の年にかけて起きた記録的な飢饉のことを指すと思われる。

十一月八日の条には、「客星の事、不審により泰俊朝臣に問う。返事かくのごとし。暁夕東西の条、驚きて余りあり。」として、この日の末尾に過去の客星出現のリストがあります。このリストに挙げられた 8 例の中には、1054 年の超新星の他に、1006 年のおおかみ座の超新星と 1181 年のカシオペア座の超新星の記録も含まれています。これらの超新星の残骸も現在、電波源やエックス線源と同定されています。

1054 年の超新星については

後冷泉院・天喜二(1054)年四月[五月]中旬以後の丑の時、客星觜(し)・参(しん)の度に出づ。東方に見(あら)わる。天関星に孛(はい)す。大きき歳星の如し。

とあります。丑の時は午前 2 時ごろ、觜と参は二十八宿中の星宿名でいずれもオリオン座にあつて、客星がこれらの星宿と同じ赤経に出た、天関星はおうし座のゼータ星で、歳星(木星)のように輝いた、ということです。また、四月中旬には超新星は太陽に近すぎて見えないはずなので五月と訂正する必要があるそうです(天喜二年四月中旬はユリウス暦で 1054 年 5 月 20 日～29 日、五月中旬に訂正すると同じく 6 月 19 日～28 日に当たります)。

筆者は 2002 年に京都文化博物館で開かれた「冷泉家展」で、『明月記』のこの部分を実見する機会に恵まれましたが、その時に過去の客星記録の部分だけ書体が違っていることに驚きました(『明月記』の原本を写真複製した印影本[2]でも見る事が出来ます)。同博物館に問い合わせたところ、学芸員の土橋誠氏から回答をいただき、それによると、この部分は陰陽寮から届いた書状を日記の紙継ぎの部分で挟み込んでいる、つまり、ここは定家書いたものではなく、陰陽寮の官人が書いたと見られる、とのことでした。これまでは専門家でも現物を見る機会がほとんどなかったらしく、今まで定家の超新星を紹介した文章では、定家が自分で調べて書いたことになっていましたが、定家は安倍泰俊を通じて受けとった紙を「ファイルした」だけということが、明らかになったのです。

3. 藤原定家と安倍泰俊

それでは、定家とこの安倍泰俊とはどのような関係だったのでしょうか？『明月記人名索引』[3]で調べると、安倍泰俊は陰陽寮に属する漏刻博士で、嘉禄元(1225)年(定家 64 才)から寛喜三(1231)年(定家 70 才)にかけて 10 回以上登場することが分かりました。養父の安倍泰忠も、建仁三(1203)年(定家 42 才)から寛喜三(1231)年(定家 70 才)に亡くなるまで同じくらい出てきて、定家に何度か天変を知らせています。『訓読明月記』[4]によって泰俊が登場する所をまとめると次のようになります。

天変を知らせる：客星を含めて 2 回

定家のために陰陽道の祭りを取りおこなう：「鬼気祭」2 回、「泰山府君祭」、
「土公祭」各 1 回

方違えのアドバイス

定家の新築中の家(一条京極邸)の棟上げの日時を決める

定家の家に来て、その頃頻発していた地震について話す

定家の家の畳をねずみが食い破ったことについて占う。病氣と火事に注意せよ、とのこと。

泰忠の病状について話す。泰忠の死去後、定家に遺言状を見せる。(計 3 回)

マンガや小説で活躍する陰陽師と違って、実際の陰陽師はこのような地味な活動をしていたようです(「陰陽師」は、もとは陰陽寮の中の役職名でしたが、後には広く陰陽道の術者を指しましたので、漏刻博士だった泰俊も、その意味で陰陽師といえます)。貴族と陰陽師とのつながりは、定家に限らず当時はよくあったことで、たとえば藤原道長は、安倍晴明・賀茂光榮・安倍吉平(晴明の子)を個人的に用いていました。陰陽師は本来は、れっきとした国家公務員でしたが、律令体制が崩れた平安時代末期からは、貴族に個人的にアドバイスをし、経済的な援助(米などの現物支給や荘園の管理職など)を受けるようになりました。上記の最後の項目で、泰俊が定家に養父・泰忠の遺言状を見せたのも、泰忠の実子との間で相続のトラブルがあって、貴族である定家の口添えを期待したためのもので、このことから二人の関係の深さがうかがえます。定家が客星の出現リストを手に入れたのも、このような陰陽師との日常的な交際があったからこそでした。

4. 陰陽道の中の客星

これで客星記録の入手ルートは分かりましたが、それにしても、なぜ定家は自分が生まれる前の客星に興味を持ったのでしょうか？ この時代には彗星や流星が出現すると、大赦が行われたり神社や寺でお祈りが捧げられたりしたように、天変は大変恐れられていました。超新星の記録が書かれたきっかけとなった寛喜二（1230）年の彗星出現のときにも、『明月記』に「客星の事、上下（の人々）殊に驚き恐るる」、「甚だ不吉」、「今日十三社奉幣（客星御祈り）」などとあり、貴族ばかりでなく幅広い層の人が天変に注目し、また恐れていたことが分かります。又、過去の客星出現の年を調べても、何事も無かったのは 1 例だけだった（つまり、それ以外はやはり悪いことが起こった）、とも書いています（十一月五日条）。

陰陽寮では天変が起きると、朝廷に提出する報告書が書かれていましたが、これを天文勘文といいます。長治三（1106）年の彗星出現時の天文勘文が、『群書類従』[5]に収められていますが、そこには、天変の観測記録と、それについての占いに加えて、過去の前例が記されています。この天文勘文を書くために、陰陽寮では過去の出現例がまとめられ、そのリストは彗星や客星が出現すると陰陽師から貴族へ渡ったと考えられます。彗星については例えば、藤原忠親『山槐記』治承二（1178）年正月七日条に 42 個の出現リストがあり、それぞれの出現後に起きた事件や天皇・貴族の死亡例が記されています。当時は、天変、特に彗星や客星が不吉な前ぶれとして怖れられ、これから何が起きそうかを予測しようとして、過去の出現例に興味を持たれたのでした。しかし、陰陽寮の天文記録そのものは、その後の度重なる戦乱で失われてしまったのでしょう。

『太平記』には、康安二（1362）年二月に彗星と客星が同時に現われた時に、天文博士の報告として、過去には客星が 14 個、彗星が 86 個出現した、とあります。このことから、客星の出現頻度（超新星・新星の出現頻度＋彗星の内、客星と判定される頻度）は、彗星の出現頻度よりもかなり少ないことが分かります。すると、客星の出現リストが作られる頻度も少なく、後世に伝わる確率もそれだけ小さいことになります。

陰陽寮ではしばしば、出現した天体が客星か彗星かで悩んで、陰陽師の間で論争が起きたこともあります。こうした議論は今から思えば無意味だったのですが、客星が超新星（と新星）だけならば、後に彗星が出現した

時にそれが客星と判定されて客星リストが作られることもなく、かに星雲の記録も失われてしまったかも知れません。そういう意味では、陰陽師たちの論争も全く無意味というわけではなかったと言えるでしょう。

また、13世紀の歴史書『一代要記』にも『明月記』とほぼ同文の、かに星雲の記録がありますが、『一代要記』では1166年の客星記録が最後であることなどから、『明月記』の記述を写したのではなく、別の機会に陰陽寮の元データから写されたものだと考えています [6]。

5. 定家の遺産

『明月記』は定家の子孫である冷泉家によって現在まで大切に伝えられ、2000年には国宝に指定されました。現在の冷泉家住宅は、御所の北、同志社大学に囲まれたところにあります。この建物は、寛政二（1790）年に建てられた現存する最古の公家住宅で、重要文化財に指定されています。普段は公開されていませんが、2005年秋に特別公開されたときに見学してきました。『明月記』は今でも、敷地内の蔵（図1）で保存されている、とのことでした。



図1 『明月記』が保存されている冷泉家住宅の蔵（写真中央の白い建物）。

以上のように定家は現代の天文学的な興味からではなく、陰陽道的な恐れから超新星の記録を残したのですが、動機はともかく、日本が世界に誇る天文記録であることに変わりはないのです。

[1] 齋藤国治, 1999, 『定家「明月記」の天文記録』, 慶友社

[2] 冷泉家時雨亭文庫編, 2003, 『明月記 五』, 朝日新聞社

[3] 今川文雄, 1985, 『明月記人名索引』, 河出書房新社

[4] 今川文雄, 1977-1979, 『訓読明月記』, 河出書房新社

[5] 塙保己一編, 1980, 『群書類従 第27輯』, 続群書類従完成会

[6] 白井正, 「明月記と一代要記」,

<http://homepage3.nifty.com/silver-moon/teika/ichidai.htm>